3　博物館事業の記録
(1)特別展・催物展・企画展

※以下一覧は、当館が主催または共催し、当館内の展示室で開催した特別展、催物展、企画展の題名、会期、入場者数、展示の概要、ポスターの画像を開催順に掲載したものである。

※入場者数のうち、催物展については開館当初から平成12年度までは入場者数の記録を取っていなかったため、空白としている。平成13年度から平成18年度までの間は一部の催物展を除いて入場者数の記録を取っており、その記録を掲載した。また、令和４年度の「安岡信義展」の入場者数は、本冊子の校了時点で会期が終了していないため、空白とした。
催物展は平成15年度から「企画展」に名称を変更した。特別展は平成19年度から「企画展」に名称を変更し、従前の「企画展」を廃止した。

※特別展、催物展、企画展の会場となった当館２階の展示室の名称は、昭和47年の開館以降は第１展示室、第２展示室、第３展示室と表記され、平成11年以降は第１特別展示室、第２特別展示室、第３特別展示室と表記されているが、以下一覧での展示室名表記は、便宜上開館当初の表記を維持した。

※ポスターの画像については、特別展および企画展についてのみ掲載したが、当時のポスター或いはその写真が残されていなかったものは掲載を断念した。チラシのみ残されていた展覧会については、チラシの画像を掲載した。

昭和47(1972)年度

特別展　開館記念展　郷土美術名作展

10月１日～10月22日	入場者総数　63,213人

本県にゆかりのある指定文化財と近世の日本画、郷土出身の著名な近代物故作家の作品120点を、第１・第２・第３展示室で紹介した。東京国立博物館寄託の国宝や重文、県内に所在する各種文化財等に加え、鳥取藩絵師の代表作や前田寛治の300号の大作《海》も展示され、質・量ともに県内では当時最大規模の展覧会となった。

催物展　鳥取県の民俗年中行事写真展

3月３日～３月25日	

県内各地で四季折々に行われるさまざまな年中行事の写真に解説を加えて紹介した。科学博物館時代からの過去10年間にわたって調査撮影した成果で、中にはすでに廃絶した行事もあり、意義ある催しであった。

昭和48(1973)年度

特別展　第４回日展 鳥取展

４月７日～４月29日	入場者総数　30,346人

昭和44年に改組された日展の第４回展を当館が主催して開催した。会場は第１・第２・第３展示室および美術展示室で、分野は日本画、洋画、彫塑、工芸美術、書。東京展で展示された2,157点から、地元出身作家の作品を含め373点を展示した。

催物展　美術資料館蔵品展

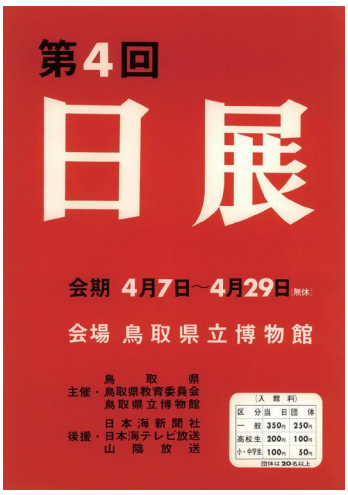
７月31日～８月19日	

当館開館を記念して寄贈された絵画や、県庁、県議会事務局、県立鳥取図書館から移管された美術資料を展示した。会場は第３展示室で、入館料は通常展の料金とし、土方稲嶺や島田元旦、菅楯彦や濱田台兒、前田寛治らの作品32点を紹介した。

特別展　郷土美術展
世界の蝶展

９月30日～10月21日	入場者総数　12,007人

郷土美術展では、開館一周年を記念して、郷土にゆかりのある近世、近代絵画の代表的な物故作家の作品を展示した。会場は第１・第３展示室および美術展示室で、根本幽峨や小畑稲升、中島菜刀や八百谷冷泉、中井金三や松田晃八などの作品を展示した。
世界の蝶展では、世界の代表的な蝶を集め各動物地理区分に従って分類展示し、その優美なカタチや色彩、擬態、変異を紹介するとともに、人間生活とのかかわりあいにも触れた。



昭和49(1974)年度

特別展　前田寛治とその仲間 ― 昭和初期のフォーブ15人 ―

4月28日～5月19日	入場者総数　8,101人

前田寛治の作品を中心に、前田と佐伯祐三、木下孝則、里見勝蔵、小島善太郎の５人が結成した1930年協会会員による作品、さらに同協会の後継的組織であった独立美術協会会員による作品92点を紹介した。

特別展　東京国立博物館巡回展 日本近世の美術・工芸

10月13日～11月４日	入場者総数　10,839人

東京国立博物館が会場県と共催で行う巡回展を開催した。東京国立博物館所蔵品から、桃山・江戸時代の美術・工芸の名品を紹介。分野は日本画、書、彫刻、金工、刀装具、陶磁器、漆工、金染、染色で、108点を展示した。

催物展　日本の野鳥展

5月21日～6月９日	

愛鳥週間にちなんで、日本各地に生息する野鳥についてその生態、分布、形態などを紹介し特に県内の野鳥も位置付けながら解説・展示した。

催物展　大工道具展

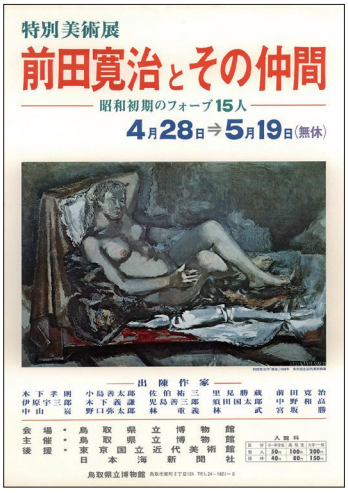
3月15日～3月30日	

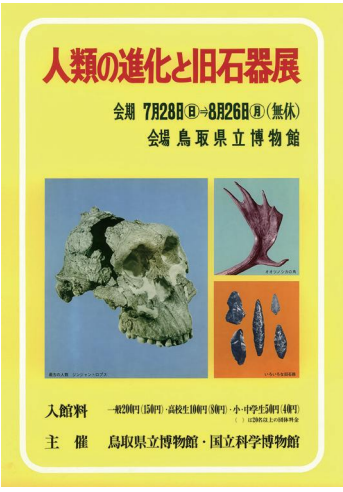
長い伝統を持ち、種類の多さと機能のすばらしさを誇った大工道具も最近の電動化によって急速に、その古い姿を失いつつある。職人の魂である大工道具にあわせて、作業衣や儀礼用衣装、祭祀具など生活面も紹介した。

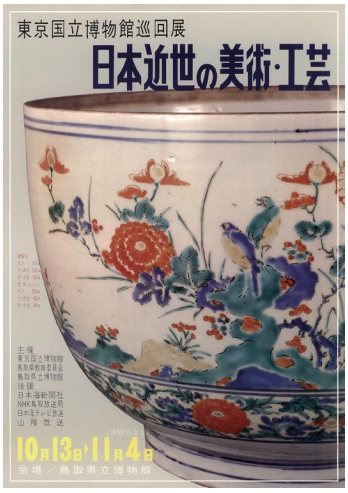
特別展　人類の進化と旧石器展

7月28日～8月26日	入場者総数　10,190人

化石人類「パラントロプス」から我が国の化石人類までの人類の進化に関する資料と、人類が育んだ文化である旧石器時代を中心に氷河時代を背景にしながら、人類の歩んだ道のりを解説・展示した。







昭和50(1975)年度

催物展　日本の野鳥展

4月26日～5月9日

愛鳥週間にちなんで日本各地に生息する野鳥についてその生態、分布、形態などを紹介し特に県内の野鳥も位置付けながら解説・展示した。

特別展　郷土の名刀　―その美と歴史―

5月11日～6月1日　入場者総数　4,092人

中国山地からとれる良質の砂鉄と古くから伝わる冶金技術は、郷土に数多くの名刀を産み出してきた。本県にゆかりの深い刀工の名作を県内外から収集し、系統的に展示して、刀の変遷とそれぞれ刀工の技術の特色を紹介した。

催物展　美術収蔵品展

6月17日～7月13日

前田寛治の代表作《棟梁の家族》の購入を機会に、昭和48年度以降当館に寄贈、寄託された彫刻5点、染色1点、前田寛治作品14点、伊谷賢蔵作品11点を、第3展示室を会場に展示した。

特別展　鳥取の明治風俗展

8月2日～8月31日　入場者総数　8,141人

明治の近代国家は、西洋文物をとり入れ、新しい産業、文化を創り出していった。この近代化の波が与えた郷土鳥取への影響と、人々の考え方、生活様式の変化を当時の社会情勢を背景にしながら捉えた。

催物展　空から見た郷土写真展

9月13日～9月24日

変貌する地域の実態を空中写真を中心として紹介したもので、当館の視覚定点資料収集事業の成果の一部を昭和43年と昭和48年とを比較対応しながら解説・展示した。

特別展　鐵齋

10月18日～11月9日　入場者総数　9,847人

京都の商家に生まれた冨岡鐵齋は、明清の南画をはじめ、我が国各派の画法を修得して独自の画風を作り出し、国際的にも高く評価された。その初期から独創的境地を拓く晩年に至る作品のうち、制作年の明らかな作品約100点を展示した。

催物展　島田元旦展

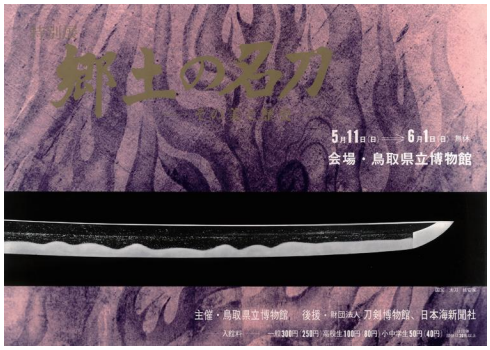
2月24日～3月21日

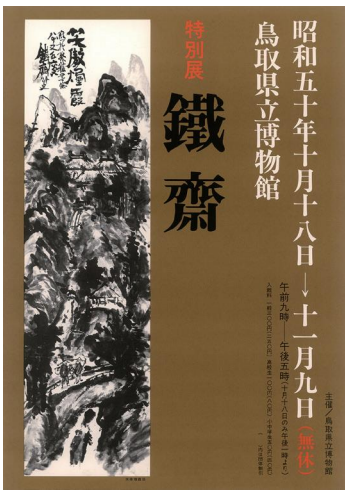
谷文晁の実弟として江戸に生まれた島田元旦は、後に鳥取藩絵師となり、藩政にもたずさわる一方、南蘋流の濃密華麗な花鳥画を数多く描いた。その画業を、館蔵品と県内借用品計19件で紹介した。

催物展　因伯の古絵図展

3月27日～4月11日

鳥取池田家藩政資料のうち、補修が完了したもの、破損の少ないものを展示公開した。因幡伯耆両国の絵図と鳥取、米子などの城下町図を中心に、地図の発達史も理解できるよう構成して紹介した。





昭和51（1976）年度

特別展　世界の貝

4月16日～5月30日	入場者総数　23,348人

貝の多様な形態や生態を紹介するとともに、貝を通じて自然界の多様性とその中に秘められた法則性に触れながら、人間生活との関わり合いについても解説・展示した。

催物展　郷土に伝わる仏画展

6月22日～7月11日	

当館が県内の諸寺院から受託している多くの仏画を中心に、平安時代から、鎌倉、室町、江戸の各時代にわたる涅槃図、菩薩図、両界曼荼羅図、五大明王図、不動明王図、愛染明王図、護法十二天図、真言八祖図など46点を展示した。

催物展　博物館資料鉱物展

7月27日～8月18日	

当館に寄贈及び寄託された鉱物標本のうち、故・大西万次郎氏（元早稲田大学講師）のコレクションを中心に本邦産鉱物の特徴を紹介し、鉱物への関心と認識を深めるよう鉱物の結晶形や色彩などを解説・展示した。

催物展　発掘展　因伯の古代を掘る

8月24日～9月12日	

近年の発掘調査の中から、因幡・伯耆両国の国庁、国分寺、国分尼寺をとりあげ、約300点の出土品を展示して奈良時代の郷土の一端を紹介するとともに埋蔵文化財への認識を高めるために展示した。

特別展　松方コレクション展

10月9日～11月7日	入場者総数　52,296人

国立西洋美術館が所蔵する、19世紀後半から20世紀初頭のフランス絵画や彫刻などからなる松方コレクションの中から、ロマン派からフォーヴィスムに至る近代西洋美術の流れを一望できる名品70点を厳選して展示した。

催物展　失われた漁具展

11月14日～11月28日	

太平洋戦争後、漁船や漁具は次第に機械化され、古い漁法は急速に失われつつある。かつての釣り針や網、イタヤガイを採った貝じょれんをはじめ集魚灯など約100点を展示して伝統的な漁民の生活や習俗を紹介した。

催物展　公募科学写真展

3月13日～3月27日	

本県の豊かな自然の一端を紹介するべく広く公募し、自然への関心と認識を深めることを目的として開催した。応募者28名、応募点数156点。

昭和52(1977)年度

特別展　第８回日展 鳥取展

4月29日～5月19日	入場者総数　21,811人

昭和44年に改組された日展の第８回展を当館が主催して開催した。会場は第１・第２・第３展示室および美術展示室で、分野は日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書。東京展で展示された2,233点から、地元出身作家の作品を含め327点を展示した。

特別展　失われた生物

10月８日～11月６日	入場者総数　25,583人

地球上に生命が誕生してから人類出現の間、多くの生物が栄えては亡んだ。これらのできごとを「石の中の秘密」「生命は海から」「海から陸へ」「恐竜の時代」「新しい時代のあけぼの」の５つのテーマにまとめ、化石とともに展示した。

催物展　日本列島の野鳥展

5月28日～6月19日	

日本列島に生息するさまざまな野鳥について、愛鳥思想の高揚と自然保護への関心を高めることを目的として、山野、湖沼、河川、海岸などの生息地別に区分して、その生態を解説・展示した。

催物展　冬の民具展

11月12日～11月27日	

鳥取県の山間部の冬は、雪に埋もれた日が長く続くので、人々は寒さから身を守るため様々な工夫をしてきた。これらは生活の近代化によって伝統的な生活用具が影をひそめてしまったが、往事の生活の跡を資料と習俗とともに紹介した。

特別展　文化庁買上　優秀美術作品展

8月６日～8月26日	入場者総数　5,131人

文化庁は昭和34年以降、毎年開催される国際展、美術団体展、個展の中から、特に優れた絵画、彫刻を購入し、公立美術館で展示紹介している。本展では、昭和41年度から50年度の間の日本画、洋画、版画、彫刻70点を紹介した。

昭和53（1978）年度

特別展　近代日本画名作展

4月29日～5月21日	入場者総数　12,168人

山種美術館が所蔵する近代日本画の中から、伝統を支えた狩野芳崖や橋本雅邦、新しい主題をもとに大胆な表現に挑んだ東山魁夷や杉山寧など、日本画壇を代表する巨匠の名作100点を紹介した。

特別展　縄文の文化

10月7日～11月5日	入場者総数　11,717人

縄文時代とその文化を理解し、現代とのつながりを考えるため、人類が土器を発明してから弥生時代に至る約1万年の長い歩みの跡を、全国各地の遺跡から出土した土器、各種の遺物、遺跡により展示した。

催物展　山陰海岸の生物展

5月27日～6月18日	

山陰海岸の生物に対する親しみを深めるため、波浪、潮の干満、急激な温度変化など特殊な環境の中での海岸生物の生活の様子や種類を紹介し展示した。

催物展　秋のキノコ展

11月11日～12月3日	

キノコに対する理解と関心を高め、正しい知識と鑑別の眼を養うため、野外で目につく食用キノコ、毒キノコ、奇抜な形のキノコ、顕微鏡による胞子の世界などを標本、写真等により展示した。

催物展　美術資料館蔵品展

6月22日～7月9日	

昭和48年8月から昭和53年6月までの間に当館に寄贈された江戸時代から現代に至る各分野の美術資料を、第1・第3展示室で紹介した。分野別に、日本画35点、洋画23点、版画6点、書跡8点、彫刻8点、刀剣3点、染織1点を展示した。

催物展　民俗行事写真展

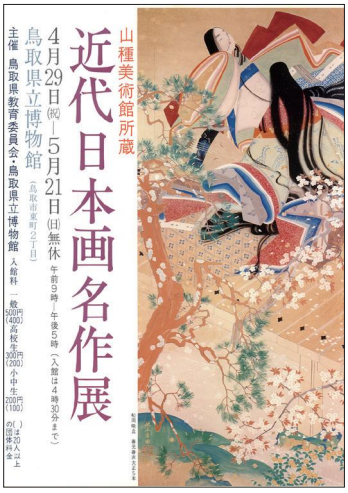
3月10日～3月25日	

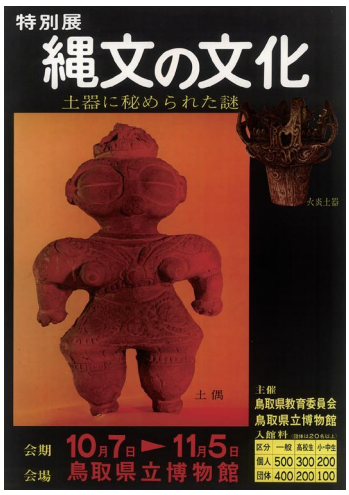
先祖がたどった信仰生活の跡をふりかえり、今日とのつながりを考えるため、鳥取県内の農山村で古くから行われてきた年中行事の写真を展示した。写真は当館で撮影したもので、農耕儀礼に関するもの60点であった。

特別展　世界の現代陶芸

7月20日～8月17日	入場者総数　3,233人

京都国立近代美術館が所蔵する国内外の現代陶芸作品コレクションから、日本をはじめ欧米など世界16カ国の作家の作品167点を展示した。作品は、用途性のない彫刻的な作品から、伝統的な陶器の形式を維持したものまで多岐に及んだ。





昭和54(1979)年度

特別展　山陰の仏教美術

4月28日～5月20日	入場者総数　9,048人

本県を中心に、山陰地方の寺院や神社などに伝えられた奈良時代から鎌倉時代に至る代表的な仏教美術品約300点を、「修験道と垂迹の造形」「末法思想と埋経」「山陰の仏像」などのテーマに分け、第１・第２・第３展示室で紹介した。

催物展　発掘資料展 ― 秋里遺跡を掘る ―

6月1日～6月15日	

鳥取市内の旧千代川下流域左岸に位置する秋里遺跡から出土した土師器、鳥船形土製品、鏡形石製品などの遺物を展示し、その成立と特徴を紹介した。

催物展　古文書展と古地図展

6月23日～7月8日	

当館が所蔵する鳥取池田家藩政資料の内、古文書、記録、書籍、古地図、書画を展示した。

特別展　科学者レオナルド・ダ・ビンチ

8月4日～8月26日	入場者総数　10,495人

ルネサンス期の偉大な芸術家でもありすぐれた科学者でもあったレオナルド・ダ・ヴィンチの科学者としての業績を紹介するとともに、彼の残した科学技術に関するスケッチをもとに製作された模型を展示した。

特別展　日本海100万年

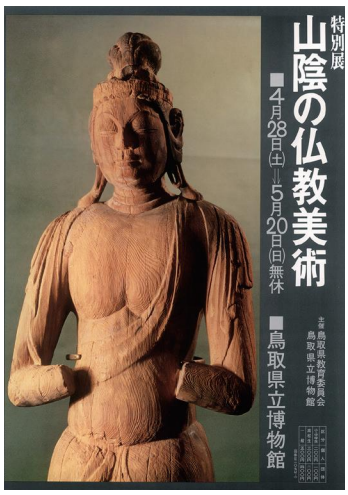
10月6日～11月4日	入場者総数　14,143人

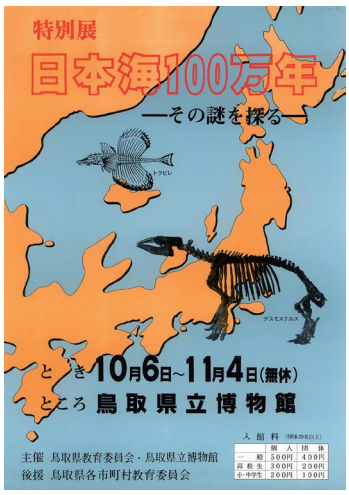
日本海は遠い過去から日本列島の成立と関連しながら特異な縁海として形成の道を歩んできた。このような道程を日本列島に残されている地質や化石、現存している生物約500点を展示し日本海をめぐる自然史を紹介した。

特別展　現代美術選抜展

12月8日～12月22日	入場者総数　3,756人

文化庁との共催により、昭和53年度に各美術団体が開催した展覧会の受賞作品のうちから推薦された作品、総理大臣賞などを受賞した作品、昭和53年度文化庁買上の作品計76点を第１・第２展示室で紹介した。





催物展　石谷美術コレクション展

1月8日～1月27日

智頭町の石谷貞彦氏より、鎌倉時代から明治初期におよぶ時代の絵画、書跡などの優れた美術資料155点が寄贈されたことを記念し、その中から特に優れた作品113点を、第１・第２・第３展示室で紹介した。

催物展　空からみた郷土写真展

3月1日～3月16日

昭和43年、48年、53年と３次にわたり撮影した航空写真により、変わりゆく郷土を紹介した。

催物展　アインシュタイン 生誕100年記念写真展

3月1日～3月16日

世界の偉大な科学者アインシュタインの生涯と博士の理論、思想を写真パネルにより展示した。

昭和55（1980）年度

特別展　日本の人形文化展

4月26日～5月25日	入場者総数　6,926人

神寄せや厄除けなど人々の祈りから生まれ信仰用具として用いられた人形が、現代の玩具、芸能娯楽人形に発展するまでの移り変わりを取りあげ、わが国の風土の中で培われてきた人形とその文化を約220点の資料で紹介した。

催物展　自然資料展

8月2日～8月31日	

自然への関心を高めるため、また夏休みにおける児童・生徒の学習に寄与するために、本館所蔵資料、寄託資料の中から自然関係資料約650点を展示した。

特別展　第11回日展　鳥取展

6月14日～7月6日	入場者総数　12,302人

昭和44年に改組された日展の第11回展を当館が主催して開催した。会場は第1・第2・第3展示室および美術展示室で、分野は日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書。東京展で展示された2,657点から、地元出身作家の作品を含め347点を展示した。

特別展　関西洋画の名作展

10月18日～11月9日	入場者総数　6,528人

本県出身で京都で活躍した伊谷賢蔵没後10年にあたり、関西洋画壇の発展に尽くした画家の名作を紹介した。会場は第1・第2展示室で、伊谷を中心に浅井忠から安井曾太郎、佐伯祐三、小磯良平、吉原治良などの作品107点を展示した。

催物展　古文書展　―因・伯の木綿―

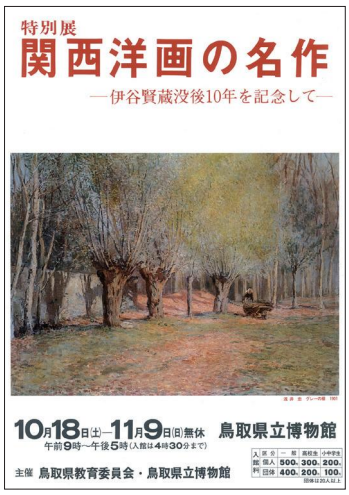
7月13日～7月20日	

地域研究への関心を高め、当館所蔵の鳥取池田家藩政資料の理解と活用促進をはかるため、管家資料、乾家文書並びに因幡・伯耆の木綿関係資料約160点を展示した。

催物展　旧鳥取駅資料展

3月7日～3月22日	

鳥取駅高架にともなって解体された旧鳥取駅の鉄道関係資料を展示し、山陰線開通から今日までの鳥取駅の発展の様子を紹介した。



昭和56（1981）年度

特別展　近世の衣裳美

4月25日～5月17日	入場者総数　5,063人

江戸時代の女性の粧いに焦点を当て、吉方観方コレクションの中から小袖、打掛、帷子等の衣裳を中心に、髪飾品、浮世絵、風俗屏風を展示し、近世の衣裳美と、染織文化の発達を、関係資料約260点により紹介した。

特別展　県政100年記念展

9月12日～9月27日	入場者総数　15,441人

県政100年記念事業の一環として、先人たちの弛まぬ努力と英知により築かれた鳥取県の発展の足跡を、各種関係資料約900点により振り返った。当館の第１・第２・第３展示室で開催した後、倉吉博物館と米子市総合研修センターに巡回した。

催物展　シカゴ・ランドフォールプレス版画展 ― 現代アメリカの版画 ―

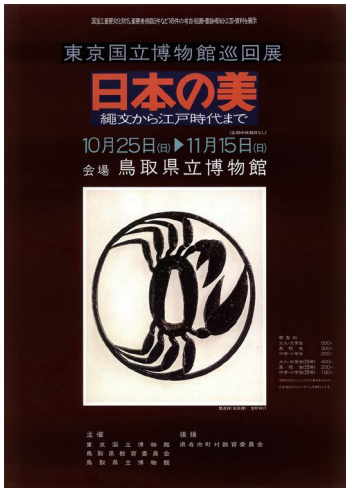
6月16日～6月28日	

アメリカの現代版画作家19人の作品50点を展示し、アメリカ美術館界の近年の動向と、アメリカ現代版画の現況を紹介する巡回展を第３展示室で開催した。出品作家は、テリー・アラン、ロバート・インディアナ、ルイス・ジメネスなど。

特別展　日本の美　縄文から江戸時代まで

10月25日～11月15日	入場者総数　9,522人

東京国立博物館が会場県と共催で行う巡回展を開催した。東京国立博物館の所蔵品から選ばれた縄文時代から江戸時代に至る特色のある古美術149件（国宝２件、重文15件、重要美術品５件を含む）を第１・第２・第３展示室で展示した。



昭和57(1982)年度

特別展　生きている化石

4月28日～5月23日	入場者総数　18,431人

長い地質時代を通して生き抜いてきた動植物の中には、古い形態をとどめているものやまさに滅亡寸前の状態のものがある。これらの生きている化石等357点を展示し、現在の自然の成立と地球の歴史のかかわりを紹介した。

特別展　内外美術名品展

10月1日～10月17日	入場者総数　8,169人

東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の所蔵品の中から、近代から現代に至る国内外の代表的な名品60点(絵画54点、彫刻6点)を第１・第２展示室で展示した。

催物展　自然資料展

7月17日～7月31日	

館蔵資料の中から卯里欣侍氏、猪俣隆一氏寄贈の外国産蝶類を中心に熱帯・亜熱帯産の甲虫類、世界各地の哺乳類並びに化石、帰化植物など約530点を展示した。

催物展　館蔵美術資料展

11月3日～11月23日	

第１展示室を会場に、館蔵資料の中から本県にゆかりの深い作家の作品52点を選び、江戸時代から現代に至る本県の美術の流れを紹介した。分野は日本画、洋画、版画、書、彫刻、工芸。

特別展　藩政時代の写生画と文人画

8月7日～8月29日	入場者総数　4,267人

藩政時代の鳥取で活躍した写生画家、文人画家8人の絵画作品129点を展示し、江戸時代の郷土の美術文化を紹介した。会場は第１・第２・第３展示室で、主な出品作家は土方稲嶺、島田元旦、片山楊谷、黒田稲皐。

催物展　鳥取城

3月20日～4月3日	

久松山を利用した典型的な山城である鳥取城(鳥取城跡附太閤ヶ平として国史跡)に関係した絵図、古瓦、歴代藩主肖像画等を展示した。

昭和58（1983）年度

催物展　前田寛治　― 油彩と素描 ―

4月９日～６月26日	

第３展示室を会場に、館蔵資料を中心に前田寛治の初期から晩年までの画業の変遷を系統的に構成して紹介した。油彩画は50点を展示し、素描は３期に分け計52点を展示した。

特別展　世界の児童画

4月29日～５月29日	入場者総数　10,356人

世界各国の子どもたちの作品を鑑賞し、その表現に対する理解を深め、併せて国際意識の向上に資することを目的に、幼児から中学生までの絵画や版画作品を紹介した。会場は第１・第２展示室で、県内と国内より300点、海外より500点をそれぞれ展示した。

特別展　地球のふしぎ

７月16日～８月21日	入場者総数　8,105人

鉱物は地球の形成過程を知るための重要な手がかりであり、人類が文化を築き上げるために欠かせないものである。このような観点に立って鉱物への関心と理解を深めていただくための特別展である。

特別展　辻晋堂展

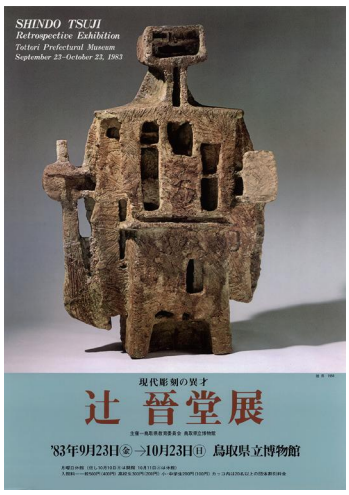
９月23日～10月23日	入場者総数　5,767人

陶彫という魅力ある造形分野を確立し、現代彫刻界に独自の位置を占めた辻晋堂の三回忌を迎えるにあたり、京都国立近代美術館との共同企画により、その生涯の業績を回顧する展覧会を開催した。

催物展　堀家資料
― 儒家堀家をめぐる人々 ―

11月１日～11月20日	

鳥取藩の御儒者であった堀家に伝わり、鳥取藩の文化史、幕末史の解明に欠くことのできない貴重な資料である堀家資料の寄贈を機に、全貌を展示紹介した。



昭和59(1984)年度

特別展　はにわ

4月28日～5月27日	入場者総数　11,077人

長瀬高浜遺跡(旧羽合町)から出土した大量の埴輪群を中心に、山陰・山陽・関西・関東の代表的な埴輪約200点を展示し、古墳時代の郷土の歴史と文化を考えた。

特別展　近代日本美術の巨匠

10月6日～11月4日	入場者総数　8,600人

日本芸術院は、帝国美術院当時からの会員の傑作や受賞作、日本の近代美術の発展に貢献した作家らの作品を多く収蔵しており、この中から日本画、洋画、彫塑、工芸、書の各分野の秀作102点を紹介した。会場は第1・第2・第3展示室。

特別展　京の染 稲垣稔次郎・小合友之助

7月7日～7月29日	入場者総数　2,101人

型絵染で重要無形文化財保持者に認定された稲垣稔次郎と、臈纈染で絵画的な世界を染め出した小合友之助の作品119点を展示し、京都の染を代表する二人の優れた感性と個性的な表現世界を紹介した。会場は第1・第2・第3展示室。

催物展　空から見た郷土写真展

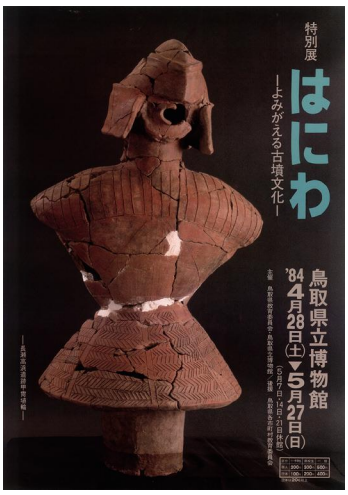
3月1日～3月17日	

昭和43年から5年ごとに実施している郷土視覚定点資料収集事業の成果から航空写真82点、平地・展望写真105点を展示し、県内各地の経年的変貌と発展の姿を紹介した。

催物展　生駒標本展

8月7日～8月30日	

植物分類学者であった故・生駒義博氏が採集された多くの植物標本のうち、このたび整理できた標本約600点と文献類20点及び採集用具類30点等を展示し、故人の業績を紹介した。



昭和60（1985）年度

特別展　神々の美術

4月27日～5月26日	入場者総数　4,815人

日本を代表する神道および神仏混交の美術に、あわせて山陰地方の神社・寺院に伝え残された関連資料を展示し、その造形美を紹介するとともに、日本や山陰地方の歴史文化を見つめ直す展覧会を開催した。会場は第１・第２・第３展示室。

特別展　昆虫の世界

7月26日～8月25日	入場者総数　12,467人

昆虫は地質時代を通して多様な形に進化し、地球上のさまざまな環境に適応し、動物の中で最も種類の多いものである。このような昆虫類の種類や特徴について解説・展示した。

催物展　近世のやきものとぬりもの展

6月18日～6月30日	

第１展示室を会場に、江戸時代の陶磁器と漆器を紹介した。陶磁器では伊万里、備前、九谷、織部、唐津などの大皿、壺類35点、漆器では蒔絵、螺鈿、堆朱などの化粧箱、硯箱など59点を展示し、近世の工芸美を示した。

催物展　中島菜刀展

9月3日～9月16日	

院展で活躍した本県出身の日本画家である中島菜刀の没後30年にあたり、その画業を回顧する展覧会を開催した。展示は県内に残る作品によって構成し、初期から晩年まで73点の作品で菜刀の仕事を紹介した。

昭和61(1986)年度

特別展　山陰の大名

4月26日～5月25日	入場者総数　11,886人

羽柴秀吉の鳥取城攻めから幕末まで、山陰地方を支配した大名の人物や治績を伝える資料を展示し、地域社会の発展と変遷の一端を紹介した。

催物展　自然資料展

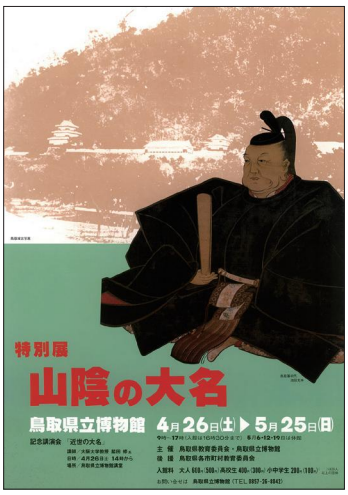
8月1日～8月28日	

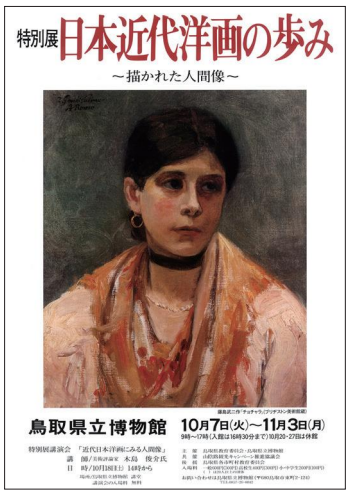
私たちの身近に見られる動物・植物・岩石・化石等の自然資料を展示・解説した。また、児童・生徒の夏休みの自主学習に役立つよう学習室(学習コーナー)を設置した。

特別展　日本近代洋画の歩み ― 描かれた人間像 ―

10月7日～11月3日	入場者総数　8,441人

江戸後期から100年以上にわたる日本の洋画表現の歴史を、国内の美術館や博物館が所蔵する人物画を通して紹介した。会場は第1・第2展示室で、出品作品は平賀源内からワーグマン、黒田清輝、藤田嗣治、東郷青児らによる97点で構成。





昭和62(1987)年度

催物展　因伯の古地図展

3月28日～4月19日

当館所蔵の鳥取池田家藩政資料から因幡・伯耆両国の国絵図をはじめ、城下町図、村絵図を中心に展示し、紹介した。

特別展　狩野派の名宝 ― 400年の歴史を一堂に ―

4月25日～5月24日　入場者総数　8,874人

狩野派の始まりから明治時代までの約400年の主な展開と、あわせて鳥取藩の狩野派絵師であった沖家と根本家の絵師たちの作品を取り上げ、近世日本文化の一端を紹介した。会場は第１・第２・第３展示室で、出品作品は67件。

特別展　恐竜と鳥獣の歴史

8月1日～8月30日　入場者総数　18,377人

長い地質時代をとおして全盛を極めた恐竜と、その後に現れた爬虫類・鳥類・哺乳類たちの興亡の歴史と現状を解説し、環境の変化に適応できず滅びかけている動物たちのことや、人間と自然の関わりについてその一端を紹介した。

特別展　開港への序曲 ― ペリー来航と日本の開国 ―

9月6日～9月23日　入場者総数　6,147人

ペリーが率いるアメリカ艦隊が浦賀に現れて、わが国の鎖国は解かれ、国際社会に仲間入りをした。日本の幕末史における開国の様子を全国各地の資料を展示して紹介した。

催物展　考古資料展 ― 発掘された古代の情報 ―

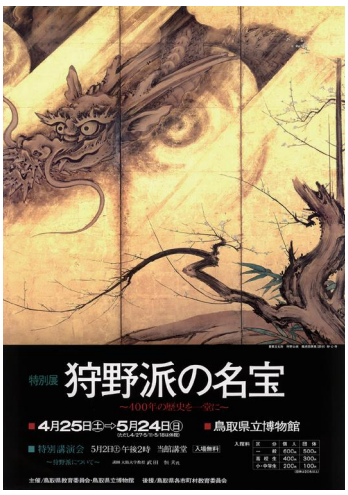
10月21日～11月15日

近年に県内で発掘された考古資料の中から、米子市の目久美遺跡・池の内遺跡などから出土した各種農耕具、土器などを展示した。

催物展　尾崎悌之助遺作展

10月31日～11月11日

昭和初期以来、力強い油彩画を発表し、二科展や行動展などで活躍した本県出身の画家である尾崎悌之助の没後一周年を迎えるにあたり、その画業を回顧する展覧会を開催した。会場は第１・第２展示室で、120点の作品を紹介した。



昭和63(1988)年度

特別展　近代版画のあけぼの

4月23日～5月22日	入場者総数　3,787人

近代版画の曙と言われる大正から昭和初期に活躍した「日本創作版画協会」の作家たちの活動を紹介するとともに、県内や神奈川、滋賀の子どもたちの版画を展示し、現代の版画教育に創作版画の精神が受け継がれていることを紹介した。

催物展　第31回日本伝統工芸中国支部展

9月18日～9月25日	

日本工芸会および日本工芸会中国支部との共催により、同中国支部の第31回展を第３展示室で開催した。日本工芸会中国支部の会員および一般応募者の伝統工芸作品(陶芸、染織、木工芸、漆芸等)91点を展示した。

催物展　自然標本展 ― 夏休みに学ぶ自然のいろいろ ―

7月27日～8月21日	

自然への関心を高め、児童・生徒の自主学習にも役立つよう、身近に見られる昆虫や海そうをはじめとして、化石や岩石の標本などを展示した。

特別展　くらしを支える匠の世界

10月7日～11月6日	入場者総数　6,386人

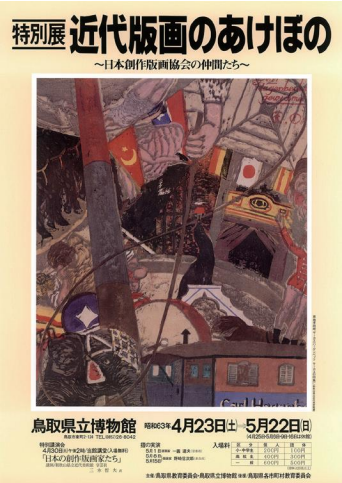
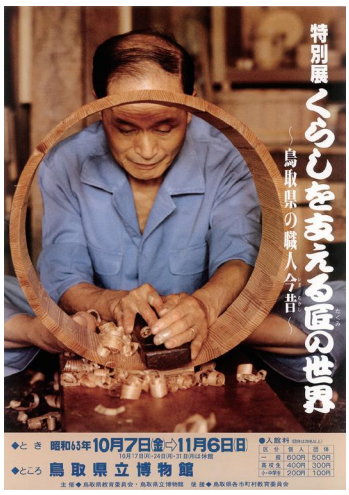
日本には職人のもつ伝統的な技が伝わり、私たちの生活が支えられてきた。職人の技術や生活をとおしてモノ作りの意味を再発見、地域の個性豊かな生活文化を紹介した。

催物展　君野コレクション展

8月7日～8月21日	

故君野正明氏から寄贈された文箱、硯箱などの文房具や、織部棚、煙草盆、鏡台といった調度品などの漆芸品を中心に、伊万里焼などの陶芸品や鳥取藩絵師の絵画などを紹介した。会場は第１・第２展示室で、151件の作品を展示した。

催物展　絵馬と信仰　― 鳥取県の絵馬 ―

11月15日～12月4日	

鳥取県内の寺社に伝わる絵馬、奉納額の優品を展示し、地域の歴史や信仰の姿を紹介した。